

# 東日本大震災被災地報告

開成町長 府川裕一

3月11日に発生した東日本大震災は、太平洋沿岸の広い範囲に甚大な被害をもたらした発生してから3か月が経過しました。町では現在の避難所の状況や避難されている方の生活環境、自治体の対応、ボランティアセンターの現状などを視察し、町の地域防災計画の策定と今後の防災のまちづくりに役立てるため、6月8日（水）～10日（金）の三日間にわたって町長ほか4名の職員が宮城県石巻市の避難所等を視察しました。

6月8日から10日まで被災地視察に行ってきました。

11日から、東日本大震災復興支援イベントとしてあじさい祭が行われました。その目玉は、東北物産市です。現地のお土産やお酒などを販売



炊き出しをする自衛隊員

することで支援しました。

## 一 目 目

東北物産市の窓口である宮城県商工会連合会に、足柄上商工会の大鹿会長と共に伺いました。商工会員のうち45%の方が被害を受けられ、営業中止・廃業・未定が38%だそうです。さらに県内33商工会69事業所のうち、13商工会19棟が被災してしまい、商工会自体の機能もマヒしているようです。長い支援が必要です。あじさい祭の後も、さまざまなイベントや、新しく新松田駅前開設された「まちの駅」での販売ができるよう支援していきたいと思えます。

## 二 目 目

石巻市にある避難所の一つである青葉中学校に、町職員を派遣していますので、その激励に行きました。ここでは、自衛隊が常駐していて、炊き出しとシャワーが完備されています。避難場所は、体育館だけでなく一般の教室も使用していますが、石巻市職員はおらず、開成、寒川町職員の2人と緊急雇用で雇った臨時職員数人で運営しているため、学校への負担も相当大きいようです。町でも命を守るための避難訓練実施の重要性と、その後で、学校施設が避難所となった場合の学校運営と避難所運営の調整をどうしていくのかの検討も大変重要なことだと認識しました。

## 三 目 目

ボランティアセンターのある山元町の現状を聞いてきました。社会福祉協議会が担当しています。専門のボランティアスタッフが運営している



ようです。実際社協が運営したら社協本来の仕事ができなくなってしまう。全部自分でやる必要はなく、経験豊富なスタッフに来ていただき、お願いした方がうまくいく気がします。

各町に行くために、巨理町、岩沼市、名取市、仙台市、多賀城市などの海岸線を通りました。どこも本当に悲惨な状況です。瓦礫が片付けられている所は一部です。まったく手付かずのままが大部分です。片付が終らない限り次には進めません。小さな町でできるかと言えませんが。何でも



撤去された瓦礫

国がすぐに動かないのでしょうか、不思議でなりません。

被災者の気持ちは、一日も早く瓦礫が撤去されて、復旧や復興に取り組んで行きたいと思っているはず。

これらの撤去作業において、国がやるのか県がやるのか市町村がやるのかの具体的な実施主体が決まらずに、行政同志お互いに責任逃れして前に進めないことが原因ではないかと思いました。こういった大災害が発生した場合の瓦礫の撤去などについては、残念ながらこれまで地域の防災計画には定められていません。

事後処理の対応についても、日ごろから関係機関と協議や調整しておくことの大切さがあらためて実感できました。わずか3日間の被災地訪問でしたが、「現場を見る」ことの重要性和共に、現場でしかわからないことを数多く体感することができました。この貴重な体験を活かして、町民の皆さんがいつも安全で安心して暮らすことのできるように、しっかりと地域防災計画の見直しに取り組んで行きたいと思えます。

## 石巻市避難所運営支援チーム・第8陣に参加して

開成町保険健康課 古屋 純

5月23日(月)から30日(月)までの8日間、東日本大震災で津波の大きな被害を受けた宮城県石巻市に避難所を支援するため神奈川県から派遣されました。

私が派遣された避難所は、石巻市立蛇田中学校避難所で178名が避難してきていました。避難してきている方たちは、自分の家などの財産はすべて津波に流され、何もなという方たちばかりです。私と同じように神奈川県から派遣された職員3名、石巻市臨時職員3名、避難所リーダー11名、避難所運営ボランティア1名の計8名で避難所の運営を行っています。24時間体制で避難所に詰めているのは、私たち神奈川県派遣職



後列右から2人目が本人

員3名のみです。避難所で生活するにあたり、必要なルールなどは避難所同士で決めており、ある程度自治体制が確立されてはいましたが、避難者同士のトラブルは毎日のように起きていました。避難所となっている体育館内は、フロアが避難者の居住スペースとなっており、舞台上が支援物資倉庫兼私たち派遣職員の居住スペースとなっています。舞台の絨帳は下ろされ、支援物資は避難者からは見えないように保管されており、避難者が舞台上がつかれることも禁止されています。衣服などの支援物資はたくさんありますが、色や形状は選べません。また、それぞれの避難者のスペースにパーテーションもないため、プライバシーもまったく確保されていない状態で、ストレスもたまっているようでした。

蛇田中学校避難所から自転車で5分くらいのところにある青葉中学校避難所には自衛隊が常駐しており、温かい食事や入浴施設などを毎日、自衛隊から提供されていました。また、市内の他の避難所にはボランティアが入浴施設を設置してました。蛇田中学校避難所では、入浴施設はありませんし、温かい食事も不定

期なボランティアの炊き出しがある時のみしか食べられません。この他にも各避難所の格差を感じることが多くありました。現在、被災地の行政機関で最優先事項として取り組んでいることは、罹災証明の発行や瓦礫の撤去、仮設住宅の設置などで、避難者の待遇面については二の次となっているように感じました。確かに復興には、都市計画などのハード面の整備が必要不可欠ですが、そこに暮らしている人たちの生活が安定していくことが復興への道ではないかと思えます。



避難所となっている蛇田中学校体育館

普通のことか普通にできない状況の中で、どのようにして今も被災地で生活している人たちの生活の質を確保していくか、とても難しい課題にぶつかり、考えさせられる機会になりました。